

# 『家屋雑考』の流布と「寝殿造」の定着過程

日本建築学会計画系論文集/ No. 646/ pp. 2701-2707/ 2009年12月

正会員 加藤 悠希 君

本論は、「寝殿造」なる言葉と概念が、いかにして定着してきたか、その過程を「家屋雑考」の流布の状況から解明しようとするものである。

「寝殿造」は日本建築の基本的な用語の一つであるとともに、「寝殿造」自体、日本建築の特質を理解する上で最も重要な形式の一つである。こうした言葉の定着過程には、それを受容し、有意義なものとして捉えた歴史的状況そのものが示される。本研究は、「寝殿造」の概念と言葉が国学分野における研究に主導されつつ定着した過程を実証し、近代日本の黎明期において「日本建築」が体系だったものとして編成されてゆく明治中期の社会的、学問的状況を解明する上で重要な知見をもたらすものである。

「寝殿造」に限らず建築に関わるこの種の基礎語の定着に関する研究は、建築史のみならず意匠研究においても意義深い研究の進展が期待できるものであり、本研究の萌芽性を高く評価し、奨励賞に相応しいものと判断する。